

被服の変遷に関する一考察

その3 古代の服飾『魏志』倭人伝

古元千鶴子

序 説

狩猟、漁撈中心の縄文時代をすぎ、水稻耕作が全面的に展開する弥生時代に相当するこの時代の日本に関する文献史料としては、わずかに『漢書』『後漢書』『三国志』などの中国史籍に記された若干の記事があるにすぎない。貴重な史料ではあるが、伝聞の誤りのほかに、中華思想その他の先入観にもとづく誤解のあることも考慮にいれながら、『魏志』倭人伝の記載のなかにある服飾に関することを私なりに古代像を探ってみよう。

日本に国が存在することが、はじめて文献にあらわれたのは『漢書』地理志であって、

「楽浪海中有倭人、今為百余国、以歳時来、献见云。」とある。日本について信ずべき最古の記録であって、楽浪海中の倭人とは、朝鮮の海のむこうにある倭人ということで、日本人を指し、前漢末ないし後漢のはじめには、日本人のことがあつた程度楽浪を通じて中国人に知られていた。西紀1世紀前後の「倭人」は、古代日本の文明をつくりあげた母体であり、近代の日本人の原型をなした集団で、当時は社会的にも政治的にも統一のない集団であつたが、中国、朝鮮の諸民族から区別された「倭人」という特殊な集団とみなされていた。西紀1～3世紀に中国の史書に記録された「倭人」は、すでに弥生文化時代から、前期古墳時代への過渡期にあたり、それは、縄文から弥生への長期にわたる労働の歴史の所産であり、倭人は『魏志』倭人伝が伝えるような特徴のある生産、習俗、生活および政治形態をもつ集団として他から区別される迄の成長を綴られた全文をみて、服飾について問題点をひろってみよう。

この『魏志』倭人伝とは、後漢のつぎに魏、呉、蜀漢の三国鼎立の時代があつて、この三国の歴史をまとめた『三国志』は、三国が滅んで間のない3世紀末ごろ、晋の陳寿（297年没）によって書かれ、その『三国志』の中の『魏書』東夷伝倭人の条（普通『魏志』倭人伝という）によるところが多い。

1. 地理的位置として

「夏后少康之子、封於會稽、断髮文身、以避蛟龍之害、」とか「計其道里、當在會稽東冶（「冶」の誤）之東、」とは、すなわち「倭の位置を推察すると、中国の會稽（浙江省の北部）や東冶（福建省の一部）の東方にあるらしい」とか、また「所有無與儋耳・朱崖同。」とは「物資の状態は儋

耳（不明）、朱崖（海南島）と同じだ」などと書いてある。倭の国王の地理的位置は南方に位置していると考えていたらしく、現在の浙江、江蘇あたりの会稽や、福建の東冶というような南中国の東海中または、広東の海南島に似た地方と想像し、日本は南方の国という固定観念が強く、日本の状態を南方的に書きまとめた趣がある。

「断髮文身以避蛟龍之害」とは南方「會稽」のことで、「夏后少康之子」に関係して記されている。夏后禹は治水し中原の土地を制度づけた功績を伝える帝王で、その子孫の小康が会稽に封ぜられたという。史記夏本紀に司馬遷は、禹が諸侯を江南に会せしめてその功労を計ったので、禹の崩後この地に葬られて、これを會計（會稽）といったと伝聞されている。

2. 文身について

倭の水人の記載に、

「男子無大小，皆鯨面文身……」

「今倭水人，好沈没捕魚蛤，文身亦以厭大魚水禽，後稍以為飾，諸国文身各異，或左或右，或大或小，尊卑有差。」と水人文身のことが目につく。これは2世紀前半にわが国に存在した水人が、水中の作業中に大魚水禽の類を威圧したり、危害を受けない呪術的要素をもち追いはらい生産に必要な習俗であった。末盧国に「好捕魚鰕，水無深淺，皆沈没取之」とあり、北九州沿岸は特に著しかったことを伝えられ、海士、海女の分布からみると水人の採集は大体西日本の海岸に限られたようで、黒潮の流れに沿った地方のことであったと考えられる。水人の生産は、東南アジアから古代国土に伝えられる黒潮文化でもあったらしい。文身の「刻画其身，以為文也」とは、入れ墨のことで、人体の肉体に加工したもので、後世の徳川時代に盛行したイレズミ、ホリモノとは異った性格のものといわれる。「ただのちには裝飾にするようになり、諸国の文身は各々異なり或は左にし、或は右にし、或は大に或は小にと尊卑差があったという。水人作業の実行的、呪術的であったものが、後に裝飾とされた。漢の文帝のころ成立した礼記の王制篇に、「中国戎夷五之民，皆有性也，不可推移」と述べ、「東方日夷，被髮文身，有不火食者矣」とあって、「被髮文身」が東夷の特異性のように考えられていたようだ。

「断髮文身以避蛟龍之害」とは、史記の周本紀のなかに、周の祖先の古公亶父に長子の太伯、次子の虞仲、末子の季歴の三子があり、亶父のあとは、末子の季歴が相続することとなり、「乃二人（太伯、虞仲）亡，如薳，文身断髮，以讓季歴」とあり、長子太伯と次子の虞仲とは荊蠻（中国地方）に亡命して、「文身断髮」したという。左伝哀公七年子貢の言葉のなかに、太伯が「断髮文身」した物語りもあり、穀梁伝にも哀公十有三年に「吳，夷之國也，祝髮文身」と記されている。

黒子には「昔者越王句踐，剪髮文身，以治國」とか、戦国策にも「祝髮文身，錯臂左衽，甌越之民也」などの、「断髮文身」とか「被髮文身」とかいうものは、古代南中国の特殊な習俗として古代の中国では注目されていたようだ。魏志には断髮や祝髮あるいは被髮などの文字はみえないが「皆黥面文身」と誰もが入れ墨をしていたかのように書かれている。「黥面」とは、黥刑、墨

刑、鯨劓などの刑罰として中国古代に多く見られるし、また史記南越尉佗列伝に南越王興が漢を通じ「除其故鯨劓刑，用漢法」とあるので古く鯨劓刑があり、これを改めたといわれる。史記の匈奴列伝には「匈奴法，漢使非去節而以墨黥其面者，不得入穹廬」という「黥面」には違った意味がある。冠帯の漢人も匈奴に使しては、黥面しなければならなかったらしく、「男子無大小，皆黥面文身」「自古以來，其使詣中國，皆自稱大夫」と書かれてるのは、水人のことではなく、魏への倭王の使者が匈奴系の北方に使するときの外交様式に用いたのではなかったかということが伺える。被服の起原の一説に装飾説として、皮膚に色付して勇者に見せたことは、人間が肉体に加工したもので、自然ではない。被髪、断髪、結髪の頭髪の加工も服飾の一つと考えるのなら、「文身」もまた人間の服飾とみてもよいだろう。水人作業の実用的それも呪術的でもあったのが、装飾とされ、倭人の諸国の別によって地域的な特殊性を表現し、人間の地域的な所属を示し、尊卑のある社会的身分を指示する証章ともされたようだ。

3. 原始衣について

高橋健自博士が、私たち祖先が埴輪土偶によって象徴されている服装をもつ以前に、如何なる服飾文化をもっていたかという問題について、古墳文化を中心とし、その埴輪土偶の服装より古い倭人伝所載の服飾に注目されて原始的服飾を原始衣とされた。これが広く大和に中心点をもった日本の祖先のものとしたのである。博士と同様に倭人伝所載の服飾を「原始衣」とし史的に観察してみると、

- (1) 『男子皆露紒，以木髥招頭，其衣横幅，但結束相連，略無縫。』

「袈裟衣」または「横幅衣」

- (2) 『婦人被髮屈紒，作衣如單被，穿其中央，貫頭衣之。』

「貫頭衣」

- (1) 袈裟衣 または横幅衣

「紒」とは結髪のこと、「髪」と同じで「露紒」とは、ただ結髪にすぎない紒を露出していて、「帽子をかぶっていない」という意味にすぎない。高橋博士は「男子結髪を象徴する美豆良に該当する」といわれるが明らかでないといわれる説もある。しかしやがて「みずら」と呼ばれる「まげ」がはやり出して「みずら」を結っていたらしい。「みずら」とは、「耳に連る」という言葉が詰まったのだといわれている。頭の毛を中央で左右に分け、それを耳のところに集めてたばねたものである。埴輪人物像をしらべてみると、耳のあたりでそのままたばねたものと、更に肩のあたりまで垂らしたものと二型式にわかれる。それを「あげみずら」と「垂れみずら」と分けてもよいだろう。垂れみずらは、埴輪人物像によってみると、どちらかといえば上流社会の人々に好まれていたのではないと思われる。つぎの古墳時代の埴輪男子像や『北支』の倭国伝の「髪を兩耳の上に重ねる」という記事から、いわゆる「みずら」であったと推察され、次第に美豆良へと発展したものと考えている。

「以木髥招頭」の「髥」は「綿」と同じで木髥は木綿のことだが現在の綿でなく「植物繊維で

できた巾で、日本では楮の皮をさらして作った繊維をユウといった」と述べ、「招頭」とは「頭にまきつける」ことで、博士は「頭部を巾で巻くことを鉢巻といい、中世婦人のそれを桂巻といい、その初期に抹額といい、その昔には鬘といったが、これは髪の乱れを防ぐものと説明されている。又古代人の「かつら」は飾りのつもりで頭を巻いていた、その「かつら」は「木綿かつら」といって、白い「きれ」を巻く外に、つる草や花の類、中には稲の穂を巻くのもあった、今でもお祭りなどにその古代の風俗を伝えているところがある、京都の葵祭りに「葵かつら」をするのもその一つであり、この「かつら」は古代の被物の一つといってよい。

「其衣横幅、但結束相連、略無縫」

博士は「長い巾を裁縫せずに体に巻いて結び留める仕方」で、僧侶の袈裟に見られる着装法で、一方の肩から斜めに反対側の脇の下に「きれ」を数回打かける形を特徴とする」ということから「袈裟式衣」と名づけられた。ドイツ語では *Schrägenporwurf* と呼んでいる。「斜めに打かける布帛」という意味で今日の仏僧が、「ふろしき」のような形の布帛を、肩から脇下へと斜めに打かけそれを「けさ」と呼んでいる。今日ビルマ、セイロンに住む仏僧は裸の上に黄無地の長い布帛を斜に何回も巻いているだけで、これが仏僧の「けさ」の本来の形のものであると考えてよいだろう。この仏僧の「けさ」によっているのだろうが、「斜め」ということを「けさ」といい慣れているので、ドイツ語にいう「斜に打かける布帛」の意味で、袈裟衣と名づけられた。今日の仏僧の「けさ」も「けさ衣」の一種であるが、「けさ衣」本来の形のものではない。変形した「けさ衣」だとしている。「袈裟」の法衣は、仏教の中国伝来以来、僧形も中国的な服飾様式を加えたであろうが、もとはインドの比丘たちの衣服で、酷暑のインドの古代からの服飾を伝えたものであり、左右の腕を露出して労務に服することから右袒、あるいは左袒という礼法などの片肩ぬぎの習俗も成立したようで、この様式は広く熱帯地方などに行なわれ、この熱帯服から袈裟式の衣服を思いついたことは倭人伝に適合した解釈とも考えられる。「原始文化は並行す」といって、年代が遡るにつれて簡易化し、世界に相通ずるものがある。男子の服飾は一つ幅のものをそのまま斜に巻きつける着装法は、インド・台湾・エジプト、アツシリヤ、ペルシャなどにあるところから、袈裟式衣と称えギリシャではこれをヒメイションといい、ローマのトガもこの系統である。古代ギリシャ人の「けさ衣」は、まず腰巻衣をつくり、それを左肩から右脇下、胸からもう一度左肩に打かけている姿が、世界的に広く行われていた。今日印度の農民の「けさ衣」を着ているのは、長さ8・9米もある白無地の「きれ」をまとい、中流以上の婦人は、この「けさ衣」を形式的にまた儀礼的に下に洋服を着た上に着ている。農民の「けさ衣」を第一義的のものとすれば、洋服の上に着る場合は第二義的になり、装飾的、儀礼的の要素が多く布地も薄手の布帛が用いられている。仏僧の「けさ」も、中国、日本でも第二義的のものとなり下に普通の衣と呼ぶものを着ていた。西暦8世紀頃に、その形式化した「けさの形に変化が起り、今までの長さのきれを、1米位の長さに切り、横に横にとつないだ形のものにした。今日でも「けさ」を七条、九条とつないだ「きれ」数の多いのを立派なものとされている。第一義的と第二義的とかいう言葉は、服装の発達を考えるに必要なことで「けさ衣」の場合、その下に地の着物を着るようになると、第二

義的になったのだが、腰巻衣の形から発達した下衣は上衣といっしょになり1部式から2部式の服装になったのだろう。この場合腰巻衣は、第二義的のものになったのではなくて、第一義的存在のものとみななければならない。ローマ人の「袈裟衣」をみると、ヨーロッパの古代歴史に活躍したローマ人は、初めはこの「袈裟衣」を第一義的な衣服に用い、トガと呼んでいた。今のワンピースドレスの基本といってよい衣服が使われるようになりこれをチュニカと呼び、働くに都合よくチュニカを着ていたが、権威を自慢するローマ人は、衆人の前に出る時は、チュニカの上にトガを巻くようになり、トガは第二義的の性質のものになった。形が次第に帯状になり、ロールムと呼ばれる幅狭い装飾用の帯になり西暦7・8世紀になると複雑さから、肩からかけた「たすき」のようなものになってしまった。そのたすきをかける人は、身分の高い人か、国民からあがめられるべき権勢のしるしとなった。古代日本人の「袈裟衣」は、彫刻や絵画に「証據」になるものを残していないが、部分的なものを挙げてみると、日本では、昔第一義的衣服に用いていた着物が、後の時代には神の祭りとか、葬式に着る祭服や葬服に用いるという習慣がある。神は古代の豪族であり昔から変らないし、神に仕える時は、昔の習慣どおりにするので、その昔のおもかげをとどめている。奈良から平安時代の文献に、皇大神宮に仕える女の人々が、意須比を第二義的衣服として着物の上に打ち掛けるということがある。祭服に意須比を用いるということで、丈が二丈五尺、二幅の白絹といわれ『万葉集』に打掛けるとあるので「袈裟衣」の形が想像される。西暦6、7世紀頃につくられた埴輪中、死んだ主人に仕える女子像を現わしたものがある。その女子埴輪に「袈裟衣」を第二義的衣服として肩から脇下へと打掛けている。これも祭服であり、葬服でもある意須比をまいて死んだ人に仕える女人の姿を推察することが出来る。意須比は、第二義的衣服となった「袈裟衣」であるといってよい。また男子や女子の埴輪に「たすき」のようなものを掛けた姿も「けさ衣」の第二義的に使われているものと考えられる。古文献に、神に仕える時に「たすき」をかけるとか、采女のように貴族に仕える女性が「たすき」をかけることがあげられている。伊勢の皇大神宮の神宮が肩にかけている市明衣もたすき的一种といわれる。明治初年ごろ、子供が生れると地方によって生まれてすぐ、ヒナマキとかマキモンと呼ばれる布切を巻いておき、その後に袖なしの着物をテトオシとよび7日目に初めて産衣を着せる習慣があり、これも布切れで体を巻くことは、第一義的の「袈裟衣」とみられる。テトオシとは産衣をさして当地方の古老の会話にも聞かれる。

「其衣横幅、但結束相連、略無縫」

横に「幅」の広く織った布帛を身につけた衣服で「横幅」の布帛とは織横糸の意味らしく、弥生式時代の紡績具や機織具については既報の通りで、中原虎男氏の「織物雑考」のなかで、アイヌ人の織機を考究され、そのカカリケムと呼ぶ糸巻針は、緯越具（梭）で、アメリカ、インデアンなどが用いたのと、同系のものであり、我が国後世の同具が古代ギリシャ、マレイ半島などの系統のものらしく、アイヌのものと系統を異にするといわれたが、登呂出土の緯越具はアイヌのカカリケムと同系で同様式のもので大分県安国寺遺跡からも出土している。古代には登呂やアイヌと同じ糸を縦に巻くものが、アイヌに伝って残り、後世の横に巻くものは絹織などと共に伝え

られたらしく、水田耕作の農耕とともに、我が国に伝来したのだろう。弥生式遺物の布巻具の布巻部から、当時の布幅を追求され検討した潮見浩氏（世界考古学大系日本Ⅱ）によれば、この時代の布幅は「12—13匁、25匁前後、50—60匁」の3種類であったというのが現在の遺物の結論のようだが、当時の布は手織で、その布目の織成は森本、島田、中山の3氏の調査では「経糸2に対し緯糸1の割合」で、西日本でも「日本で生産された布と決定されるものではないが経糸1、3に対し緯糸1の割合」になっているようである。そこで横幅衣というのは、一幅25匁の布帛の広さで横に二幅をならべ合わせて、二幅の布をつづり合せ、体に巻いて結び留めた仕方と私は考えたい。「但」、「略」を考えると、「略」は「少也」、「稍也」という意味もあり、「略無縫」とは、「裁縫せずに」という意味ではなく、「少し、あるいは幾分縫ってあるような、綴り合せた位だが裁縫したほどのことではない」という意味にとりたい。穴のあいた骨の針は織機より以前旧石器時代のソリュートレアン期に、ボタンと共に発見されている。ただ縫うこと、文字通り2つの布をつぎ合わせることは、如何に粗雑なものにしても、織機のような高度の技術を作りだした人間が、それに先立つ数千年間に針の利用を、布に応用できなかったということは考えられないので、横に綴り合せて、幅広くして袷袷のように身体をまとまった『袷袷衣』だったと考えたい。

(2) 貫頭衣

「婦人被髮屈紒」とあり、「被髮」といえば礼記王制篇の東夷に、「被髮文身」が見え、「被髮左衽」とは論語憲門篇に見える東狄之俗である。「被髮」は「披髮」とも書き、乱れ髪のことといわれている。古く「披」は「分」の意味に用いられ披髮は、髪を毛を左右に分けることにもなる。「屈紒」とは、まげて髪をむすぶことで、「被髮屈紒」とは、頭髪を左右に分けて後で結び、その結髪を曲げるという。根を結んだ先を分けず、すぐ島田髷のように丁度竹の皮包みのように結ぶ。この島田髷式の髪は、徳川の中世頃、東海道島田の女性が結び始めたという説があるが、起原はこの時代であったといえる。頂上に平らに結ぶのと、後の方に豎やの字の帯のように、豎にびったりと付けて結ったのとある。後方に結ぶのは、頭上に物を載せて運ぶ必要から結ぶことになった。その風は京都の八瀬大原の女性などがあげられる。髪は皆結髪をしていたが庶民のなかには垂髪もあり、又髪を一つに取って頂上で根を結び、その余りを二つに分けて双緇に結び上げる等、倭人伝ふうな髪型の発達したものが多く、埴輪女子の髪型に見られる。

「作衣如単被、穿其中央、貫頭衣之」の「単被」は元の蘇天爵の詩に、「婦来重藉繡錦眠、不信江南婦人単被穿」などに見られ、ひとえの夜着であったという。「被」には寝衣とか衾とかの意味もあり、ネマキ、フツンの類も考えられる。しかし眼につく巻いたり帯をしめたりした外形の記述がないので、一枚の布で作られただろうと解釈される。博士も、当時の単の夜具のような、肩幅より広い布帛を腰丈かまたは身丈の倍位の長さに切りそれを中央で折り折り目の中央に孔を穿け、そこに頭を貫いて着たので、「貫頭衣」と呼ばれた。その孔に頭を貫いた「きれ」を、胸と背中に垂らしただけのものもあり、動くに邪魔にならぬよう、両脇は少しはつづり合せたものもあると思われる。貫頭衣も中世から近世にかけて祭服や葬服に使われている事実がある。平安、鎌倉時代に神社に参詣する人々が、貫頭衣の形のものを第二義的に用いられている風俗の絵にみ

ることができ、また神官にもみられ、葬式の伴をする人々が、貫頭衣を第二義的に用いているチハヤ姿は、国宝滋賀県来迎寺蔵十戒国にもあり、これに類する服飾として競馬や武人に袴褌があり、ギリシャ、ローマのチュニック、ミクロネシアにもこの類があり、南方にはポンチョという貫頭衣が現に行なわれている。また埴輪人物像には貫頭衣の形式の祭服や葬服を現わしたものもないので、第一義的衣服としてみられる。ここで考えられることは、男女の服装が事実そのままだとすると、当時の日本人の生活様式は、東南アジア的であったわけで、魏志の陳寿の先入観がまじっているようで、同文が『晋書』の林邑伝、『南齊書』の扶南伝などにある南ベトナム、カンボジアの地帯の地誌的記載や、『漢書』の地理志の海南島についての記載にも見られる。また魏の使者の見聞記に相違ないが、文中に下衣の記載がない。同書、馬韓の西海中の大島の条に「其衣有上無下略如裸」とあるのみで、裳的なものはなかったように考えられる。しかし「原始衣」は、労働者の勤労服でもあり、水用耕作者として手足を泥中に入れて働くため腕部や脚部の露出しているのはまだよい。『魏志』の記載はこの姿の外見を書いたもので、肌着までは述べていない。しかし犢鼻褌とか腰巻のような小衣の布が肌着になっていたことであろう。犢鼻褌とは「股塞ぎ」の事で、仔牛の鼻のように足を出す孔が二つあいている所からの当字である。仏僧の三衣僧伽梨、鬱多羅僧、安陀衣の一揃いは偏袒右肩などする上半身から全身にかけた大きい布、腰から下の脚部をおおった中位の布、肌着で股をかくした小さい布の三衣が、当時の下着の役割をしていたことも古文献に見えるので、何等かの形であったのではないかと推察される。

4. 古代の衣料について

「種禾稻紵麻、蠶桑絹績、出細紵縑縹」とは、稲作がゆきわたり、紵麻も栽培していたし、桑を植えて蚕をかい絹をつむぎ、かなり上質な細紵（カラムシの繊維で織った布）や縑（絹をかたく織った布）や縹（木綿）を産すると記されている。養蚕と絹織を強調し、4世紀の大型古墳から立派な絹が多くみられるので、既にその前からあったとみてよいだろう。「斑布二匹二丈以到」とあり、倭女王卑弥呼は景初三年に斑布二匹二丈をおくっている。「其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人、上獻生口・倭錦・絳青縑・縹衣・帛布」とあり、卑弥呼の宮廷で、すでに絹織がおこなわれ、正始四年にその使者八人が、洛陽に入貢したとき持っていった貢物のなかに倭錦・絳青縑・縹衣、帛布があったとか、「壹與遣倭一中略一異文雉錦二十四」とあり、卑弥呼の死後に宗女壹与の奉った貢物のなかに異文雉錦などの絹製品がある。異文雉錦は、いまでも台湾や八丈島で原始機（いざり機）で織る紋織に似たものであろうと古代織物研究家の角山幸洋氏は述べている。「今以絳地交龍錦五四・絳地縹栗罽十張・縹絳五四・紺青五四・答汝所獻貢直・又特賜汝紺地句文錦三四・細班華罽五張・白絹五四」とかかれ、大陸の染色や織物の技術がすぐれていることが分かる。魏に贈っている政治的な事情を考えると、当時の服飾類が弥生式末期に、わが国にも生産されていたことも分るし、織技も錦に及び染色技術もかなり進んでいたことになる。又このような服飾類を身につけた呪術的、権威的な高貴の大人とか王とかが、官にいたとも思われ、原始衣よりかなり進んだ服装があったと推察される。袴とか妙とは、衣料の名であ

るが材料がなんであるのかははっきりしないが、今日われわれが、織物全体の名を「きれ」または「布」といっているように織物のすべてを妙と呼んでいる。南洋に行くと島々で違うがタペ、タパ、タク、タカ、カパという名の衣料があり、これは「こうぞ」のような桑科の木の皮をむいて、水浸し、石の上などで叩き合せて、「きれ」にしたもので、糸をつむぎ、これを織る衣料とした時代になると、『古語拾遺』のような古文文献によれば古代には布と木綿^{ぬの ゆう}と絹との三種の織物があり、「布」は麻織物で、「木綿」は漢字でみると今の木綿織だが、妙の原料となる「こうぞ」などの皮を糸にして織ったものであり、古文文献では木綿^{ゆう}と呼んでいるが、多くの人は昔の妙との区別を一緒にして後世まで、タフと呼んでいることが、多かったようだ。「妙」という名が織物の総称で織物の名として使われた。「きぬ」とは中国のケンヌという言葉から来たものらしく絹織物は中国の帰化人より養蚕や製糸が始められ当時絹織物を衣料としたのは上流社会だったと察せられる。古代の人は色に染めないで、白くさらしたものを衣料としていたといわれる。古代の風俗を伝えている神の祭りも白が尊ばれ、主に素^きの色のものを衣料としていたようだ。模様では自然を相手の、「摺」をしていたらと察せられる。

5. 風俗について

(1) 「皆徒跣」とあり男子も女子も裸足であったといわれるが、登呂遺跡より田げたが見られるし、現在とさして変らない形なので、すべての人々が裸足とは考えられない。

(2) 「以朱丹塗其身體、如中国用粉也、」とみえている。「粉」とは「米の粉」のことで、説文にも「粉、所以伝面者也、从米分声」とあり、古代中国では米の粉を顔面に付着させてぬりつけたようである。「粉白黛黒」というと美人とされていた。倭人が朱丹を用いたというのだが、それは顔面だけでなく「其身體」というからには全身に塗ったことになる。全身といっても顔面頸部、腕部、脚部の露出した身体に朱丹が塗られていたらしい。朱丹は「朱」とか「丹」とかいわれたもので、本草の銀朱に「釈名、時珍曰、昔人謂、水銀出於丹砂、鎔化還復為朱者、即此也」とあるのは「朱」で、赤色硫化水銀で丹砂として産出される。「其山有丹」と書かれ、この丹砂は水銀と硫黄との化合物で、赤色顔料の朱がとれ中国では殷から顔料として用いたらしいが、弥生時代から、古墳時代にかけて死者の遺骸に塗り埋葬していたことは、考古学上明らかで、当時の倭人は生きていてもこの朱を身体に塗布することがあった。保温とか虫害を防ぐ保護、化粧とかいう実用的なものと又呪術的な意味や地域的倭人の他の種族との分割的な標識であったかも知れない。

6. 服飾品について

(1) 櫛……櫛は男性は左右の美豆羅にさすので二枚用いる。女性は頂の前に髪の毛の根に一枚さす。くしという言葉は、団子の中や、魚串と同じ言葉で、物を貫き留めるためのもので、男女共に髪をとめる為に挿す。櫛は竹が多く竹を編んだり木でも作られた。長門国の古墳より発見されたの

は、細い割竹を編んで作った唐櫛であった。髪の毛元にさす風は、宮中の女官に後々まで残って、髪上げの時には必ず額に櫛をさした。古い櫛は、幅狭く歯が長く、毛筋立の柄を切り取った形である。南洋の土人も多くこの形を用いるところがある。

(2) 玉類……「出真珠・青玉,」「真珠・鉛丹各五十斤,」「貢白珠五千孔・青大勾珠二枚・」

玉類には、勾玉、管玉、切子玉、瓊玉、算盤玉、丸玉、小玉、トンボ玉等がある。これらは紐に連ねて頸飾にしたり、腕首には手玉をし、足頸などの飾りにした。材質は青く澄んだ硬玉、赤い瑪瑙、濃緑色の碧玉、ワイン色の琥珀、透きとおった水晶、コバルト色のガラスなど色とりどりで美しい。殊に硬玉の勾玉は縄文弥生時代を通じて愛用され、古墳時代にいたっては最高潮に達した趣がある。勾玉は形が勾り、その起原は未開の時代に獣類を捕えて肉を食物とし、毛皮を着物としたところ、勇猛な動物を捕獲した自己の勇武を誇とする記念と、強い動物は守護になるという信念とによって、その爪や牙を取って頸にかけたが、その後美しい石類で作り爪や牙の尖ったところや根の太いところは美化されて今日見られる勾玉となり、真の勾玉の形になったのは、わが国独得のものらしい。管玉は竹類の管から、丸玉は草木の実などを用いたのが始めといわれ、玉造という地名は、玉の製造地で出雲にある。

(3) 耳輪……史上に記されていないが、実物が残っているのによると、古代の耳輪は、耳穴に穴を穿けて金属の環を通す。その環は玦といって、環の一方を欠き、小さいものは細くて直径0.3釐で鉛、銀、純金がある。大きいものは直径0.7釐位の金属環で、多く銅に金又は銀を被せてあり、環の大きさは指輪位の内径が普通である。

(4) 腕輪類……腕輪のことを釧といい、石釧、車輪石・鍬形石、鈴釧、銀釧がある。石釧・車輪石・鍬形石などは、縄文式時代の貝輪を碧玉で作ったもので、石釧は巻貝を横断した貝輪の形を、車輪石は放射状の線が車輪のように見えるので江戸時代の学者が車輪石と名づけた釧はカサガイ製の貝輪で、鍬形石は鍬の形に似ているので鍬形石となづけられた釧は、ゴホーラなどの巻貝を縦断した形で、これらがそのまま碧玉にうつし作られたのである。一般に穴が小さくて腕の細い人でないと手が通らず形が大きく腕輪として使用するのに無理がある。従って腕輪としてよりむしろ一種の儀器または宝器として作られたとも考えられている。腕輪は縄文式時代から貝製品であったが、弥生式時代にはガラスや銅の腕輪が輸入され、北九州から発見されている。又鉄、木製漆塗のものもあった。石釧・車輪石・鍬形石が弥生式中期に、青銅やまれに銀の釧が後期に作られた。後の古墳時代の宝器的な役割を果たす碧玉製品をうむ源となった。又銅釧の周囲に数個の小鈴がつけられたりした。小鈴は馬の飾りや鏡、冠などにもつけられ興味深く、銀釧には耳飾りの金環2個がつけられており、特別な人のためのものであった。南朝鮮に金や銀の釧が使われているので輸入されたものかもしれないといわれる。

7. 生活について

「無良田，食海物自活，乗船南北市糴。」

「差有田地，耕田猶不足食，亦南北市糴。」

「好捕魚鰓,」「種禾稻」

日本には水稻耕作がゆきわたっていた。対島、壹岐や東松浦半島の未盧の国は農耕していたが、良田がないので、船に乗って交易をおこない、漁業に従ったり、また水にもぐって魚を手づかみにしたり、貝をとったりすることが上手であった。

「倭地温暖、冬夏食生菜,」とあり、倭地は温暖で、冬も夏も野菜を食べると書かれ、弥生時代の遺跡より種子類が出ているのでうなづける。

「始死停喪十餘日、当時不食肉,」とは、縄文時代よりシカやイノシシが多くいて、それを食用としていたらしく、喪に服する時には肉食を避けたとか。

「其地無牛馬虎豹羊豕,」その他に牛馬虎豹・羊鵠がいないとのことだが、牛や馬がいないのは、大袈裟と思ったが、古墳時代以前の遺跡で牛馬の骨の発表例が少いので、この記事が虚構でもなさそうだ。

「食飲用蕒豆手食,」とは高杯の上に蒸した米や副食物を盛り手づかみで、これを食べたという。今日南方諸国の原住民がライスカレーのような食ものでも、鍋から指でつまんで食べ杓子で汁をすくっているの、当時は一般に手食の風習であったことが分る。昔からあるお手漕という手づきの作法、手食の名残りであるといわれ、中国や、日本の古い伝統のようにいわれる箸の習慣は後にはじめられた。

「人性嗜酒」「有薑・橘・椒・薑苽,不知以為滋味,」……人生、酒をたしなむと弥生人も酒の味を知って、米づくりとともに酒づくりもしたのだろう。また薑、橘、椒、薑苽が自生して、調味料の素材が豊富にあるのに、食事に利用することを知らないと不思議だったらしい。

「有屋室、父母兄弟臥息異處,」……屋室があって父母兄弟は寝処を異にしている

「不盜竊,少諍訟,」「其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戶及宗族,」……盜竊せず、諍訟が少く、法を犯すものがあると、軽い者はその妻子を没し、重いものはその門戸をほろぼし、宗族に及ぶとある。

「其俗舉事行來、有所云爲、輒灼骨而卜、以占吉凶、先告所卜、其辭如令龜法、視火圻占兆。」……方法は種々あるとして、呪術的に吉凶を判断しているのは、昔も今も変わらないようだ。

「其行來渡海詣中國、恒使一人不梳頭、不去蟣蟲、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人、名之爲持衰、若行者吉善、共顧其生口財物、若有疾病、遭暴害、便欲殺之、謂其持衰不謹,」……邪馬台國が中國に使節を送る時、一種のマジシャンが同行する風習は、未開民族にもその例が見られる。

「其死有棺無槨、封土作冢,」……人間の死を悼み、倭人は墓を作り葬った。その状態も記載されているのだから、未開ながら人間讃歌をよろこびたい。「卑彌呼以死、大作冢、徑百餘步、徇葬者奴婢百餘人」とあり、倭人伝の墓制の記事には、弥生時代らしいものと、古墳時代らしいものが並存しているといわれるが、魏の尺度一步は140cm余りであるから140m余りとは、誇張気味である。

説 明 文

1. 双結結び	2. 3. 島田鬘式	4. 竹を編んだ木 節 長門国古墳	6. 竹で編んだ木 節 南洋土人所用						
1	2	3	4						
			5. 竹で作った木 節 南洋土人所有						
			5						
7. 美頭良に結髪 した男子 下総国出土	8. 緩らしきもの をかけた男子 上野国出土	9. 10. 美頭良に 結髪した男子 常陸国出土	11. 櫛らしきものを 刺している男子 備前国出土						
7	8	9	10						
			11						
12. 鬘を施した 男子 上野国出土	13. 14. 15. 対生式結髪に鬘を施 した女子 武蔵国出土	16. 頸玉と耳環 をかけた女子 下総国出土							
12	13	14	15						
			16						
17. 鍬形石	18. 車輪石	19. 石釧	20. 小玉	21. 丸玉	22. 切子玉 水晶製	23. 切子玉埋木製	24. 琥珀製棗玉	25. 管玉	26. 勾玉
17	18	19	22	23	24	25	26	27	28
腕輪類各地出土									
20. 銀の釧	21. 鈴釧	22. 袈裟衣想像図 高橋健自氏推定	23. 貫貫頭衣想像図 高橋健自氏推定						
20	21	29	30						
31. 古代ギリシャ人のけさ衣姿	32. ローマ人のトガの各様式 1. 第一義的 2. 第二義的 3. たすきの形	33. たすきをかけた女子埴輪 埼玉県出土, 群馬県出土							
31	32	33							



「始死停喪十餘日，當時不食肉，喪主哭泣，他人就歌舞飲酒，已葬，舉家詣水中澡浴，以如練沐。」……死者の家族の喪中の様子や，東南アジアにみられる「みそぎ」とよく似た記録がなされている。

「見大人所敬，但搏手以當跪拜，」また「下戸與大人相逢道路，逡巡入草，傳辭說事，或蹲或跪，兩手據地，爲之恭，對應聲日噫，比如然諾。」……倭人伝には身分をあらわす語が見られる。支配層と一般民衆の様子が綴られているが，また政治組織が整ってきたためにあらわれたのかもしれない。

「其俗國大人皆四五婦，下戸或二三婦，婦人不淫，不妬忌，」……一夫多妻の習慣を記録したものらしいが，母系的社会であったのではないかという仮説がきわめて可能性であり，識者のなかに異議もあるようだ。

結 語 と し て

日本人が，どのようにして未開状態から文明の戸口迄歩んできたのか，『魏志』倭人伝をとおして，史的な記録をながめると倭人の生活がある程度正しく伝えられているのが見え，衣服についてのはっきりした存在が認められ，弥生式終末と古墳時代への飛躍的な発展を伝える問題を引き出してくれる貴重な古典だと感じた。

参 考 文 献

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1) 日本歴史 1，原始および古代。 | 5) 古代の服飾 猪熊 兼繁著。 |
| 2) 日本歴史 1，神話から歴史へ。 | 6) 土器とはにわ 村井富雄著。 |
| 3) 服装の研究 錦織 竹香著。 | 7) 歴世服飾考 田中 尚房。 |
| 4) 衣服の歴史 後藤 守一著。 | |